

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語研の窓 第17号 (2003年10月1日発行)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001944

国語研の窓

17号

平成15年10月1日 第17号 発行 独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集 国立国語研究所普及広報委員会
「国語研の窓」部会
〒115-8620 東京都北区西が丘 3-9-14
電話 03-3900-3111 FAX 03-3906-3530
URL <http://www.kokken.go.jp/>



奥より国立国語研究所1号館、2号館、3号館（手前屋根）
（2003年8月、研究所南側団地から撮影）

もくじ

- 暮らしに生きることば 1
研究室から：『日本語話し言葉コーパス』 2
新世紀の日本語教育を担う人材の育成
—日本語教育研修— 4
日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 5
ことばQ&A 6
公開研究発表会のお知らせ 6
新刊 7
お知らせ：「ことば」フォーラム、日本語教育研修 7, 8

暮らしに 生きる ことば

「私はいくつ？」

まだよちよち歩きの子を連れて散歩をしていると、通りすがりの人が娘に「私はいくつ？」などと話しかけてくれることがあります。さて、この場合の「私」は一体誰のことを指すのでしょうか。

「私、僕、あなた、君」は人称代名詞と呼ばれる語です。「私、僕」の類は話し手が自分自身を指す表現で、「あなた、君」は話し相手（聞き手）を指します。

しかし、前述の「私はいくつ？」の場面では、話し手（＝通りすがりの人）が話し相手（＝娘）に向かって年齢を尋ね、自分自身ではなく、話し相手を指して「私」と言っています。「私」は話し手自身を表すというルールから考えると、この「私はいくつ？」の「私」の使い方は論理的におかしいように感じます。

次に、母親が自分の子どもに向かって、「ママは今忙しいから、しばらく一人で遊んでね」と言うときを考えてみましょう。このとき、母親にとっての「ママ」は論理的には母親の母親（＝子どもにとっ

ての祖母）になるはずで、この例もよく考えてみると奇妙な感じがします。

しかし、子どもを相手にした会話では、このような例は日常ごく当たり前に受け取られていて、理屈にあわないと疑問に思うことすらないかもしれません。

このような現象は研究者によっていろいろな解釈がされているようです。たとえば、大人が子どもに向かって話す場合、子どもと心理的に同調し、子どもの立場（視点）と自分の立場を同一化しているという説明もされています（鈴木孝夫著『ことばと文化』岩波新書）。

この説明にしたがうと、「私はいくつ？」の例では、通行人は話し相手（私の娘）を自分の立場から捉えずに、私の娘の立場に同調したと解釈できます。娘から見た娘自身は当然「私」と呼べますから、娘の立場に立った通行人は娘を「私」と呼ぶことができるわけです。

同じように、「ママ」の例も母親が自分の子どもの目を通して自分自身を見ていると考えれば理解できるでしょう。（福永 由佳）

『日本語話し言葉コーパス』

1. 必要性

およそ日本語にかぎらず言語研究の対象は、実際上その大部分が書き言葉であり、話し言葉の研究はかなり遅れています。その最大の原因はデータ作成のコストの高さにあります。

1時間の音声を書き起こすには、数十時間を要しますが、文字による書き起こしにはイントネーションやポーズなど話し言葉固有の現象は表現されていません。これらの現象まで含めて検索できるようなデータを一人で準備しようとする、研究の準備だけに人生の大半を費やすことになりかねません。

表題に掲げた『日本語話し言葉コーパス』(以下本コーパスと略します)は、日本語の話し言葉を対象とした研究用のデータベースであり、話し言葉研究の確かなインフラを提供しようとするものです。

総務省の通信総合研究所および東京工業大学との共同研究として科学技術振興調整費の交付を受け、1999年から5年計画で構築を進めてきました。現在は、来春の一般公開にむけての準備を進めています。

2. 内 容

本コーパスにはいくつかの画期的と言える特徴があります。まず、従来の音声データベースの大半が、新聞記事など、書き言葉の原稿をプロの発声者が読み上げた朗読音声を取録しているのに対して、より

自発性の高い音声を取録しています。

また、従来のデータベースが高々数十時間程度の規模であるのに対して、650時間以上、単語数にして700万語以上の音声を取録しています。

研究用付加情報の豊富さも重要な特長で、音声の内容を精密かつ組織的に書き起こした転記テキストにくわえて、転記テキストを単語に区切って品詞分類した情報も提供します。

転記テキストは、講演の内容を単純に文字起こしたものではありません。言い直しや言い淀みは、そのまま正確に記録されていますし、講演者の発した笑いや咳などの非言語行動も記録されています。

さらに、各講演が聴き手に与える印象を取録技術者が主観的に評定したデータも提供します。その講演がどの程度自発的であるか、発話のスタイルがどの程度あらたまっているか等の評定です。

以上は650時間の音声全体に対して提供される情報ですが、データの一部、約44時間分に対しては、上記にくわえて精密な音声ラベルが提供されます。音声ラベルには二種類あり、ひとつは音声を構成する子音、母音、ポーズなどの分節特徴についてのラベル、もうひとつはイントネーションの特徴を記号化したラベルです。

下の表は、本コーパスに格納する音声の分量をジャンル毎に分類して示したものです。

音 声 の 種 類	話 者 数	ファイル数	独話／対話の別	自発／朗読の別	時 間 数
学 会 講 演	838	1007	独 話	自発音声	299.5
模 擬 講 演	580	1699	独 話	自発音声	324.1
朗 読 音 声	*(244)	491	独 話	朗読音声	14.1
インタビュー話者による模擬講演	*(16)	16	独 話	自発音声	3.4
学会講演に関するインタビュー	*(10)	10	対 話	自発音声	2.1
模擬講演に関するインタビュー	*(16)	16	対 話	自発音声	3.4
課題指向対話	*(16)	16	対 話	自発音声	3.1
自 由 対 話	*(16)	16	対 話	自発音声	3.6
再 朗 読	*(16)	16	独 話	朗読音声	5.5
総 時 間 数					658.8

* () 内の話者は学会講演ないし模擬講演話者と重複

「学会講演」は、種々の学会での口頭発表のライブ録音です。話者は大学院生が多く、理系の学会では大多数が男性です。「模擬講演」は、20代から60代まで、ほぼ男女同数の話者による、日常的な話題（例えば「人生で一番楽しかったこと」）についてのスピーチです。学会講演と模擬講演を比較すると、後者は前者よりも発話のスタイルが低く、より自発性の高いスピーチになっています。

この表からわかるように、本コーパスの95%は独話（モノログ）です。しかし、完全に独話だけのデータベースでは、話し言葉全体のなかで独話が占める位置を推定することが困難になります。そこで、対話などの音声も対照用に収録することにしました。

この目的のために、「インタビュー話者による模擬講演」「インタビュー」「課題指向対話」「自由対話」「再朗読」のデータを16名分収録しました。

インタビューは、学会講演と模擬講演の内容についてインタビュワーの発する質問に、講演者が回答するものです。また課題指向対話は、二人の話者が協力して与えられた課題を解決してゆく過程でとりかわされる対話です。

再朗読は、先に収録されて既に書き起こされた学会ないし模擬講演の転記テキストを同じ話者が朗読した音声です。オリジナルと再朗読を聞き比べると、自発音声と朗読音声の相違を明瞭に聞き取ることができます。

最後に朗読音声とは、新書版で1ページ程度の書き言葉の文章2種類を模擬講演の話者に朗読してもらった音声です。こちらは244名分のデータがそろっています。

3. 応 用

本コーパスに関しては現在までも音声情報処理と言語学の領域でいくつかの成果が得られています。

言語学に関する成果のひとつは言語変異現象に関する分析です。言語変異というのは、簡単に言えば、語形のユレの現象です。「データ」と「データー」が共に用いられ、「これは」が「コリャ」に融合したり、「僕のところ」が「僕ンところ」に転じたりするのは、すべて言語変異現象です。

言語変異研究の重要な目標は、複数の語形がどのような要因によって使い分けられているのかを知ることにあります。要因としては、品詞や語種など、言語そのものの要因だけでなく、話者の性別、年齢、

スピーチがおこなわれた状況など、言語以外の要因も候補となります。本コーパスを用いて、「では」が「ジャ」と発音される現象を分析した結果を簡単に報告しましょう。

この変異現象にとって最も強い要因は「で」の品詞でした。「で」が格助詞の場合（東京では雨だった→東京ジャ雨だった）、ジャの生起率は平均で2%以下ですが、「で」が助動詞の場合（生まれたのは東京ではない→生まれたのは東京じゃない）、生起率は40%を越えます。

一方、品詞以外の有力な要因はすべて言語以外の要因でした。助動詞の場合、印象評定された発話スタイルの高低と、話し手の年齢が有力で、その組み合わせによって最低0.3%（1950年以降に生まれた話者のスタイルが高い発話）から最高13%（年齢を問わずにスタイルの低い発話）まで生起率が変動します。助動詞の場合は、発話スタイルと年齢に加えて、講演のタイプ（学会講演か模擬講演か）と印象評定された発話の自発性の高低にも効果が認められ、これらの組み合わせによって最低1.7%から最高77%までの変動が生じます。

この分析結果はまだ予備的なものですが、従来の音声データベースでは、この程度の分析にも大きな困難がありました。本コーパスで種々の要因を総合的に検討することができるようになったのは、単に大量のデータが使えるだけでなく、転記テキストに言語変異が周到に記録されていること、発話のスタイルが組織的に変化するようにデータが収録されていること、さらに発話の印象が組織的に記録されていることなどの特長によるものです。

4. 公 開

本コーパスは来年春の一般公開を予定しており、DVD-ROMで12枚程度の分量になるはずです。公開の時期と方法は、今後、国語研のホームページなどでお知らせします。

本コーパスについてさらに詳しくお知りになりたい方は、インターネットのブラウザで下記URLを参照してください。コーパスの設計と予備的解析結果について、詳しい情報が掲載されています。音声のサンプルも試聴できます。

http://www2.kokken.go.jp/~csj/public/index_j.html

（前川 喜久雄）

この『日本語話し言葉コーパス』をテーマに、12月20日、公開研究発表会を行います。詳しくは6ページをご覧ください。

新世紀の日本語教育を担う人材の育成 —日本語教育研修—

●多様な日本語教育の現状に対応した人材育成

日本語教育の現場は、日本語学校や大学の留学生センターのような日本語教育機関から、地域社会に密着した教室、学校教育の中での日本語指導など、急激かつ多様な広がりを見せています。

多様化が進んだ日本語教育の状況において、「よりよい日本語教育の実現」の具体的方策を一律に処方することは不可能です。例えば、仕事のために短期間日本に滞在する人と、将来に渡って日本に住み、日本で高等教育を受けようと考えている人の日本語学習を同じように考えるわけにはいきません。

しかし、個別性をよく考えると同時に、表面的な違いの下に共通点がありはしないかと考えることも重要です。教材や学習活動の工夫や実践で得た経験的知識を相互に共有することができれば、個々の努力が広く日本語教育全体の力となり得ます。関係領域の人々との連携体制を築いていける人材が現在の日本語教育には不可欠なのです。

国立国語研究所は日本語教育に関わる現職者を対象として長期研修、短期研修、遠隔研修という3つの研修事業を実施していますが、「長期研修」はまさにそうした人材育成を目指した10ヶ月の研修です。自分の関わる日本語教育を社会的に位置付ける視点を持ち、現場の具体的な問題を実証的に検討し、他者との連携をとりつつ問題の解決を図っていく力を備えた人材育成が目標です。長期研修として、「日本語教育上級研修」と「日本語教育研究プロジェクトコース」の2コースを開設しています。

●日本語教育上級研修

上級研修は「教育内容の改善・教育環境の整備のための方法」を共通テーマとし、各々が日本語教育現場における実践・研究等から見出した具体的課題を追求するものです。

プログラムは、①相互交渉・共同作業をとおして、自らの課題を追求すること、②他者との連携のために、情報の収集・発信・共有等の方法を模索し、実践すること、の2つを柱としています。自分の現場を全く知らない相手に自分の実践での問題意識や取り組みを理解してもらうためには、学習環境や学習者の特性、自分自身の学習に関する考え方などを適切にことばにする必要があります。そうした過程

そのものが、自分自身や自分の現場を客観的に見つめ直すことになるということを重視したプログラムです。

これまでの研修参加者の所属は、日本語学校、大学、地域の日本語教室、公立小学校などと多様です。東京近郊だけでなく、山形や鹿児島など遠距離からも参加がありました。研修開始時には、お互いの状況の違いに驚くばかりであった研修生が、共同で活動を進めるうちに、例えば「学習者相互の学び合いを促す」「学習意欲をどう捉えるか」などという共通の視点を見出し、教える相手やクラスの人数、活動形態等、全く違って見える実践の間に、相互にヒントとなることながらあることに気づいていく様子が見られました。

●日本語教育研修プロジェクトコース

研修生それぞれの課題を持ち寄って研修を進める上級研修に対し、プロジェクトコースは、国語研究所が行っている日本語教育に関する研究を下敷きにし、その枠組みや知見を使って実践に関わる教師の視点で調査研究を展開するものです。現在進行中のコースは、研究所の研究課題「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を基盤とし、学習リソース調査に焦点をあてたプログラムです。

本実施をはじめた今年度は、1月～3月は毎月2回、4月以降は毎月1回、研究所に集まり、各自の調査研究に必要な講義を受けたり、研究計画の検討や調査の進行状況の報告、問題点に関する相談を行いながら、調査研究を進めています。



上級研修では修了生を2回送り出していますが、研修修了生は電子メール等で情報交換を継続し、それぞれの職場で研究会を開催したり、学会の研究会等で積極的に発信を行っています。研修を通じて築いた人間関係を基盤として、その輪を職場の同僚や多くの日本語教育関係者に広げていく修了生の活動こそが、研修の最も意義のある成果であると考えています。(石井 恵理子)

日本語教育の学習環境と 学習手段に関する調査研究

●日本語教育の多様化を把握する

近年身の回りに日本語を話し、学習している外国の人々が増えていることは周知の事実です。日本語学習者は国内では13万人（文化庁、2003）、海外では200万人（国際交流基金、1998）を超え、国内外を問わず日本語教育が拡大しています。それと同時に、学習目的や学習者の年齢などもいっそう多様化してきています。

さらに、交通手段や情報通信の高度発展に伴い、これまでのような教室の中での紙と鉛筆による日本語学習から、短期留学やホームステイなどで直接日本に来たり、インターネットを通じて海外でも簡単に生の日本語に触れたりすることができるようになりました。このように学習者及び教師の地球規模での移動や交流が加速し、様々な情報流通のあり方が変化するのに伴い、日本語を学習する、あるいは教える環境や手段も多様化し、支援のあり方も柔軟に対応する必要が出てきました。

そのためには、まず国内外で日本語を学習し、あるいは教えている人々がどのような環境で、さらにはどのような手段で日本語を学習し、あるいは教えているのかについて広く情報収集し、「多様化」と言われる現状を把握する必要があります。

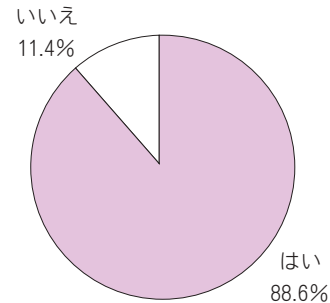
●海外調査

そこで、国立国語研究所日本語教育部門では国内外の地域を対象に各地域と連携しながら平成12年度より5年計画の大規模調査を実施しています。その一環として、平成13年度は微視的（個々の日本語学習や教育）及び巨視的（日本語教育が置かれている社会環境）視点から、学習者・教師の双方を対象とし、アンケートやインタビューの手法を用いてタイ（バンコック市内）における学習環境・手段に関する実態調査を行いました。その結果の一部を紹介します。

現地での中等・高等教育機関と学校教育以外の機関に属している学習者約6000人を対象にアンケート調査を実施しました。その結果、実際に日本語を使ってやりとりをしている人は少ない一方で、図に示したように日本語の授業以外の時間にも、テレビ放送やマンガ、雑誌等を通じて日本語を見たり聞いたりしている人は9割近くもいました。直接日本人と日

本語でやりとりをする機会は少なくとも、いかに日本語が現地の日常生活に入り込んでいるかがわかります。

日本語の授業以外で
日本語を見たり聞いたりしますか？



語学学習というとまず教科書が思い浮かぶかもしれませんが。しかし、このように海外でも身の回りにある日本語を、限られた授業時間外でも学習素材として利用できるような支援のあり方も今後考えていく必要があるでしょう。現地学習者に対するインタビューの結果からも、実際にそれらの日本語を学習素材としてうまく活用している人も見られました。例えば、日本語のウェブサイトを読んで必要な情報を収集したり、日本のテレビドラマを見て聞き取りの練習をしたり、趣味の日本語雑誌を単語ノートを作りながら読むといった人がいました。

このような現状を把握し分析することによって、現地に根差した支援のあり方を具体的に検討することができます。また、それらの素材を実際の教室でどのように使えるのかといったテーマで現地教師研修や現地派遣前の教師研修を企画することもできるでしょう。このように単にお金や物ではなく、より現地に適したより具体的な支援が可能となります。

●国内外の日本語教育ネットワークの構築

本年度の調査は、タイの他に国内で継続させるとともにオーストラリア（ヴィクトリア州）、韓国でも実施しています。今後はマレーシア、台湾での調査も予定しています。各国と国内の調査結果を比較検討することにより、国の違いに始まる多様化の現状を越え、「学習環境・学習手段」という共通の視点で議論することができ、学習環境整備のための具体的な提言が可能となります。そして何より国内外の日本語教育ネットワークが構築され、双方向によりいっそうの日本語教育の活性化が期待されます。

本調査研究の結果は、順次ホームページ上でも公開していく予定です。

（小河原 義朗）

ことばQ&A

質問 「やなぎ」さんという名字の人で、「柳」ではなく「木」偏に「卯」と書く人がいます。なぜなのでしょう。

回答 主な理由として考えられるのは、中国で隋(ずい)、唐の昔から書籍や石碑などに書かれてきた伝統ある楷書体(筆写体・書写体)の影響です。「柳」の字は、「卯」の部分がやや書きにくく、形も取りにくいいため、「木」偏に「卯」という字体で書かれることがあったのです。これは「沢」を「澤」と書くような「旧字体」と違い、漢和辞典に載っていないこともあります。

明治時代に入って各地で「戸籍」を作る際に、そうした筆写体を用いて姓名が書き込まれました。それが、戸籍係によってほぼ忠実に転記され続け、和文タイプの時代にもその字だけ手で写され、現在まで伝わってきたのです。

漢字は、書きやすさや形の取りやすさなどが求められ、中国、日本ともに少しずつ形が変わってきた歴史をもっています。楷書体でも部首「阜」は「阝」、「辵」は「辵」となっています。

また、書道を学んでいる人などは、戸籍では学校で習う字体であっても、伝統的な字体で姓名を書くこともあります。現在では、こうした筆写体は、固

有名詞を表記する場合を除くと、手書きの手紙や書道の作品くらいでしか見かけなくなってきました。「常用漢字表」は、固有名詞や個々人の表記、芸術分野には適用されないことになっているので、これらでの使用は問題とはならないようです。

姓は、祖先から一家に伝わってきたものとして、漢字の字体まで昔のまま残そうとする人もいます。そのほかに、姓を付けた当初から本家と分家を区別するために、同じ姓でも一方の字体をわざと少し変えた名残もあるほか、「吉」の「士」(さむらい)の部分を農家だからと「土」に取り替えたとか、この字体の方が字画がいいなど、様々な意識をいだきながら使い続ける人もあるようです。まれに、戸籍を作成、転記する際に字を間違ってしまったというものであります。

戸籍では、漢和辞典に「誤字」ではなく「俗字」などとされている字体については、コンピューターでも使用し続けることが認められています。住民票には、戸籍で誤字とされた字体もかなり残っているようです。政府が進める〈電子政府〉においても、それらの漢字がかなりたくさん残っていることが明らかになっており、筆写体や家そのものについての意識が薄れつつある中で、今後それらの字体がどのように扱われていくのか、注目されます。(笹原 宏之)

国立国語研究所公開研究発表会

話し言葉のデータベース―「日本語話し言葉コーパス」―

(2～3ページに関連記事があります)

■ 日時 2003年12月20日(土) 10:00～17:00

■ 会場 国立国語研究所講堂(1号館5階)

■ 内容 「日本語話し言葉コーパス」は、日本語の自発音声を大量に集めて多くの研究用情報を付加した話し言葉研究用のデータベースです。このコーパスは、通信総合研究所および東京工業大学との共同プロジェクト「話し言葉の言語的・パラ言語的構造の解明に基づく『話し言葉工学』の構築」の一環として開発を進めてきたものですが、来年春の完成時には、質量ともに世界最大の自発音声研究用データベースになるものと期待されています。今年度の公開研究発表会では、この「日本語話し言葉コーパス」について総合的な報告をおこないます。

■ プログラム ■

〈午前〉講演1 前川 喜久雄(国立国語研究所)『「日本語話し言葉コーパス」の構築と評価』

講演2 菊池 英明(早稲田大学・国立国語研究所)

「XMLを利用した『日本語話し言葉コーパス』の検証と検索」

講演3 井佐原 均(通信総合研究所)「話し言葉コーパスへの情報付与―自然言語処理の立場から」

〈昼休みを含めて2時間程度〉ポスター発表・デモンストレーション

〈午後〉講演4 古井 貞熙(東京工業大学)「話し言葉の音声認識と自動要約：話し言葉コーパスの必要性」

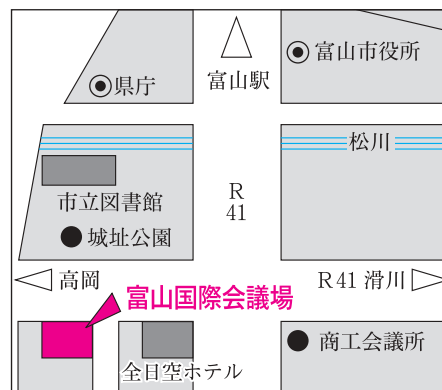
コメント・討論

■ 問い合わせ先 井上 優 電話：03-5993-7633 電子メール：mainoue@kokken.go.jp

第17回「ことば」フォーラムのお知らせ

「方言の科学—ことばのくにざかい 富山—」

日時：2003年11月3日（祝・月）14：00～16：30
会場：富山国際会議場（城址公園向い）
共催：国立国語研究所，富山市教育委員会
後援：北日本新聞社，北日本放送
協力：富山市立図書館，富山大学人文学部中井研究室
内容：富山は，方言の種類が多いこと，県内での方言の地域差の大きいことでも知られています。日常的でなじみ深い「方言」の世界ですが，実は，全国的な視野や科学的な方法で研究が進められてきました。その成果の一部をご紹介します。



プログラム

第1部 講演

■「方言の東西境界と富山」 大西 拓一郎（国立国語研究所主任研究員）

日本の方言は，富山県の近くを通る境界線で大きく東と西にわかれることが，古くから知られています。この東西対立は全国規模で考えるならどのような性格のものでしょうか。具体的に地図で見てください。

■「富山方言の地域差」 中井 精一（富山大学助教授）

富山県は，日本の西と東の文化が交錯する地域です。富山大学人文学部の研究成果をもとに，県内に存在する呉東と呉西および海岸部と内陸部という地域的なかたよりをてがかりに，富山県方言の特質について考えます。

■「社会構造と方言，その変遷」 真田 信治（大阪大学大学院教授）

世界文化遺産・五箇山郷の方言における親族呼称の60年間の歴史的移り変りを具体的に紹介します。

第2部 パネルディスカッション

第1部の講演をもとに，参加された皆さんとともに方言と富山について考えてみたいと思います。

※入場無料，ただし事前申し込みが必要。定員300名。対象は中学生以上。手話通訳つき。

申し込み：国立国語研究所 第17回「ことば」フォーラム係

〒115-8620 東京都北区西が丘 3-9-14

電話：03-3900-3111（代表） 電子メール：forum@kokken.go.jp

または 富山市立図書館 第17回「ことば」フォーラム係

〒930-0085 富山市丸の内 1-4-50

電話・FAX：076-432-7272 電子メール：lib-02@library.toyama.toyama.jp

「フォーラム」とは「広場」という意味の外来語ですが，国語研究所では参加者の方々と一緒に言葉について考えたり話し合ったりする機会を「ことばフォーラム」と名づけて，開催しています。

新 刊

- 1 第10回国立国語研究所国際シンポジウム
第2部会報告書
『日本語コミュニケーションの言語問題』
2003年7月／凡人社／B5判横組み120ページ／
本体1600円
- 2 『日本語教育年鑑2003年版』
2003年8月／くろしお出版／A5判横組み592
ページ／本体4500円

- 3 全国方言談話データベース
『日本のふるさとことば集成—第16巻 香川・
徳島—』（国立国語研究所資料集13-16）
2003年9月／国書刊行会／冊子（A5判横組み
274ページ），CD，CD-ROM／本体6800円
近刊 『分類語彙表—増補改訂版—』
（年内刊行予定）

第18回「ことば」フォーラムのお知らせ

「外字対応のヒントー図書館や電子政府の取り組みー」

日 時：2003年11月6日（木）

13：00～14：30

会 場：東京国際フォーラム

「第5回図書館総合展」

ホール B7 フォーラム第3会場

（東京都千代田区丸の内3-5-1）

共 催：国立国語研究所，紀伊國屋書店

後 援：日本書籍出版協会，日本規格協会，

情報処理学会

内 容：情報化時代の漢字問題について，皆

さんと一緒に考える機会を作り，豊

かな文字生活のきっかけを提供します。また，国立国語研究所・情報処理学会・日本規格協会の3

者連合が，経済産業省の委託を受けて開発に取り組んでいる「電子政府の文字情報基盤」について，

国語学や認知科学の観点から解説を行い，あわせて外字問題に対応するヒントを紹介し

ます。



プログラム

「図書情報検索における外字対応」 横山 詔一（国立国語研究所領域長）

Web版『日本書籍総目録』（Books.or.jp：日本書籍出版協会）の外字対応について，実演をまじえて解説します。また，早稲田大学図書館の協力により，同館の目録情報を文字コードの相違によらず「日本語のまま」海外に提供する方法を紹介し

「電子政府の文字基盤を支える学術研究」 笹原 宏之（国立国語研究所主任研究員）

外字問題の解決を目指して，電子政府の文字情報基盤が整備されつつあります。これは，どのような学術的研究にもとづいて作られているのか，分かりやすく解説し

※入場無料，ただし以下の方法で事前申し込みが必要。手話通訳つき。

申し込み方法：氏名（ふりがな）・連絡先・電話・FAX・メールアドレスを明記のうえ，電子メールにてpublish@kinokuniya.co.jpまで，事前にお申し込みください。先着150名様まで座席を用意いたします。

問い合わせ先：電話：03-5469-5919（紀伊國屋書店出版部）あるいは03-3900-3111（国語研代表）

FAX：03-5469-5959（紀伊國屋書店出版部）電子メール：publish@kinokuniya.co.jp

日本語教育研修のお知らせ

日本語教育短期研修

第2回「作文教育における，日本語教師と大学専門教員との協力のために」

2003年10月25日（土）13：00～16：00 国立国語研究所

第3回「日本語教育における文法の役割」（仮題）

2003年12月14日（日）金沢大学サテライト・プラザ（予定）

第4回「日本語学習をとらえなおす」（仮題）

2003年12月21日（日）・23日（祝）東京国際フォーラム

ITを活用した日本語教育能力の向上研修

「コンピュータと新日本語教育」（展示会・セミナー・講演）

2003年12月21日（日）・22日（月）・23日（祝）東京国際フォーラム

内容の詳細や申し込み方法などについては，ホームページ「J-Web 日本語教育の世界」に掲載します。

<http://www.kokken.go.jp/jsl>

問い合わせ先：国立国語研究所日本語教育部門研修事務室

FAX：03-3900-6559 電子メール：tanken@kokken.go.jp

©2003 国立国語研究所